

市ヶ谷から

これは、和田君が福田雅太郎狙撃事件で市ヶ谷刑務所の未決監に
ゐた、大正十三年九月から翌年九月までの間に、同志友人に宛てた
書簡を蒐めたものだ。

總てで二百餘通あつたが、その中からこれだけを選んだ。長い手
紙の一部分しか載せなかつたものもある。しかし、これだけでも「久
太」といふ人間が充分現はされてゐることと信ずる。

括弧内の六號活字の註は編者が入れたものだ。

順序は發信の日附によつた。

——編者——

【勞働運動社宛・九月十日】

敗軍の卒、兵を語らず。今更ら何をか言はんや。……生ける者に自由あれ!! だ。
いろんな所へ、トンダ迷惑が行つてゐる事と思ふ。ただ御許しを乞ふより仕方ない。僕が漸
んなことをやらうとは誰も夢にも思つてゐなかつたらう。しかし、僕としては當然すぎる程に
當然な行動だよ。

◇ 【堺利彦宛・九月十一日】

御差入の金子唯かこ年受、有難く御禮申上げます。いつか、貴殿が退院されて間もない頃、
随分久し振りで御伺ひしたきり、トント御無沙汰してゐました。體の方はもう殆んど快いで
せうね。

僕も、今年は非常に壯健です。殊に入獄してからは、地震以來の憤みがきれひに一掃されて
謂ゆる眞如の月とかを仰ひだ様な心持でゐます。従つて體の調子も非常に好いです。御安神下
さい。目的は未遂に終つたが、それも今ではアハアと哄笑して済ましてゐます。一時は未練
がましく残念がりましたが、もう其の事も何んでもなくなりました。元來僕は、貴殿の恬淡味
を些か嘲笑して來たものですが、そして今でも矢張り多少はさう思つてゐますが、然し其の僕
自身を省みる時、やはりそれが多分にある事を見出して苦笑に堪えません。お互ひに悪く日本
人臭い所がありますよ。阿々。

◇ 【望月桂宛・九月二十日】

吉祥寺へ留守番に來てくれた爲めに、トンダ迷惑だつたなア、許せ、許せ。然し、こん度の
事件に依つて、俺の不思議な行動も了解してくれた事と思ふ、少しはね。且つ俺が彼方此方に
置いてゐると噂をされてゐた謂ゆる『女』の正體も、合點してくれたらうなア。阿々。

體は至つて丈夫だ、安神せい。事と次第によつては再び婆の風に當り得るかも知れぬが、
其の時には恐らく、君の禿頭はトマトの如く變じ、俺の胡麻鹽頭は霜威クシヤクシヤたる様を
呈して居やうぞ。

それからなア、君の家庭の如き幸福な善良な人々には、殊に福子夫人の如き人には、餘り心
配させるやうな事はするなよ。第一線には俺の様な浮浪人が起つ。獨身者に限る。君の様な人
は陣の背後にあつて補助的職務をやつてくれ。傷つき倒れる者の病院になつてくれ。これ亦大
事業だ。最大必要事だ。

◇ 【江口漁宛・九月二十五日】

手布の差入は何より有難かつた。厚く御禮を言ふ。

兄の御親父の病氣を聞き、後ち間もなく永眠の悲報を新聞にて知つたが、終に御見舞にも行
かずにしまつた事を許されよ。僕は今度の事件にのみ懸命だつたのだから。

古く拜借のままだつた『南島變亂記』と『文學論』は受取つて下さつたでせうね。それから
『鐵の詩』の殘部も若し未だだつたら望月にさう言つて貰つて下さい。

兼ねて御願ひしてあつた『詩集』は、もう今日では貴兄より外に出版の萬事をやつて頂く人
がないのです。彼(中濱鐵)の爲めに、切にお願ひします。

それから、差入の本を澤山貸して下さい。此際だから何んでも讀んで見たいと思ふ。今、ト
ルストイの『戦争と平和』を讀んでゐる。中々面白い。で、いろんな讀み應へのある小説を貴
兄に御願ひする。『文學論』も少ししか讀まなかつたから、も一度差入して見て下さい。日本の
古い博文館のもの欲しい。芭蕉研究、一茶研究なんて本はありませんか。古にかへつて俳句を
思出してゐる。

體は丈夫だから安心して下さい。今、死ぬといふ時まで、僕にとつては讀書は楽しみだ。
よろしく頼む。

細君や妹君によろしく。久米正雄君に會つたらついでによろしく。

◇ 【近藤憲二宛・十月四日】

僕のとばつちりで暫く引つぱられてゐた由、許し給へ。全集や雜誌の上に大ぶ狂ひを生じさ
せた事と思ふ。

村木(源次郎)は御承知の通りの病體だ。諸事よく氣をつけてやつてくれ。要領よくやつては
るやうけれど。

豫審の方はまだ一向進まない。一回調べられた切りだ。が、事件はすつかりはつきりとして
了つてゐるんだから、案外早く済みさうに思ふ。

諸君は皆な健在だらうね。今、社には誰れ誰れ居るのか。全集の経過、雜誌の今後の方針な
ど、ついでに知らせてくれ。僕等の事件に思はされる事なく、諸君の今後の運動が、大地を踏
みしめて、根強く、底深く、發展せん事を心から祈る。何んと云つても勞働組合が大切だ。農
村との結合が大切だ。

◇ 【宮島資夫宛・十月六日】

早速用事のみ述べる。

室内筆記は、昨日結果を傳へられたが、要するに駄目だ。僕は、萬年筆の許可を乞ひ、自傳と感想録と讀書餘録と詩歌集との筆記を願つたのだ。所が『自傳を生立ちから主義に投ずるまで書き、それを平田檢事に参考として見せる、(僕の願書の理由の一部にこの事を書いたのだ)のだけは許すが、其他は一切許さない。それも持出しは絶対に許可せず、平田檢事に見せた他は燒棄する』といふのだ。これぢや仕方がないからね。あきらめて了つたよ。

然し、僕の『生ひ起ちの記』は、どんな事があつても書いて見たいといふ欲望を抑へられないのだ。で、兎に角、平田檢事に見せるだけでもいいから書いて見るつもりだ。永遠に僕の手に渡らないで、諸君の手に渡らないでも、書くだけは書いて見る。馬鹿々々しい事だと笑つてくれるな。頭にあるものを一度書き綴めて見るといふだけでも、今の僕には或る満足が得られるんだ、ハッキリ一つのものに纏めて見るといふ、その事だけの満足だ。

僕の體は至極丈夫。量つて見ればきつと體量は増してゐるだらう。そして、鼻の下とアゴとに髯が亂生したので、いゝ加減に親父臭くなつた。殊にその髯たるやゴワゴワした奴で、赤いのと黒いのとでキレイだ。

秋雨に濡らして見たき髯生えぬ

此處へ來てから特に感じられる事は、二尺四方の窓から眺める自然界が、非常に美しく見える事だ。勿論これは誰れでも感ずる、そして平凡な眞理だが。

◇ 【江口渙宛・十月十日】

ドテラ有難う。感謝に不堪。過日差入に預つた毛布にくるまり、秋冷安らかに壯健なれば安神を乞ふ。

鐵窓は君が家の方に向ひて開き、暁ねき天の美しさの、斯く押しつめられたる小さき穴より覗き上ぐる時、更に美しく感じらるるも面白し。

月も照らせこれも浮世の一世帯
といふ一句を得た、如何。

◇ 【江口渙宛・十月十四日】

君が九日間も監視廳に留置かれたとは、何んといふ事だらう。彼等の理解なさ加減は全く驚くの外はない。しかし、それも、僕の様な人間と交際した罰なんだから、仕方ないといふあきらめて許してくれ。

差入れて貰つたドテラは、成程さう言はれて見ると、那須であの當時僕が借宿してゐた物だね。些か感慨なきにしもあらずだ。いろいろな事を思ひ出すよ。小松屋での生活。寒さ、雪、木枯、那須山の煙、殺生石、元湯通ひ、熱湯修行、綿の褌、炬燵、而して堀口といふ風に。そ

れから更らに、春風、春草、木の芽、櫻、辨天湯、つつじ、八幡湯、そして且つ堀口といふ風に——。然し奴も死んだ。可哀さうでもあつたが、奴らしい死方だつたとも考へられる。あの醜惡な悲惨な姿となりつつ「いいよ。何處へも行かないよ。放つておくれ、妾は此所で斯うして死んでやるんだ」と、言放つた奴——あれが即ち奴だ。奴の全部だつたのだ。いい所でもあり、短所でもあつた。しかし、ああした心持ちは、俺にはよく解るんだ。で、黙つて顔を見つめて、そして俺はあの時歸つて來た。奴は死んだ。

この事を、そしてほんとこの事を知つてゐて呉れるのは君ばかりだ。他の人達は、何んにも知らないで、種々な臆測を奴の事ではあるやうだ。殊に或る人間なんかは、堀口の事が、僕の此度の事件に重大な關係がある(心理的に)など知つたか振りをやつてゐる事と思ふ。が、奴のことと僕のこんどの行動とは、何んの關係もないといふ事を眞當に知つてゐてくれるのも、此の意味ではやはり君一人だ。こんな事を考へながら、昨夜はそのドテラに依つて温かく寝た。

昔し早稻田文學に、廣津和郎が「アルチバセエイフの死生觀」といふのを翻譯して載せた事があつた。あの文の收めてある廣津の單行本があつたら差入れてくれないか。いま、宮島君の入れてくれた、トルストイ全集の三を讀んでゐる。中々面白い。トルストイを一向讀まないでただ盲滅法にクサしてゐたのはいささか恥しい様に思ふ。呵々。

◇ 【堺眞桐宛・十月二十日】

九月二十日、十月七日附の御見舞狀落手。感謝に不堪。芝居の繪葉書は特に感謝します。が寫眞の主はハテ誰れかしら、猿之助の様でもあり、さうでもない様でもあり、僕としては甚だ自負を傷けた譯け。ハテめんやうな。

僕、非常に壯健、この段御休神を乞ふ。毎朝冷水摩擦をやり、座禪三昧に入ること多時といふ有様です。そうして、夜になると、三尺の窓越しに朗々たる秋の月を仰いで「けり」「かな」と首をひねつてゐます。人間、頭に白髪が多くなつてくると、落ち着く様ですなア。呵々。

僕、高瀬(清)君とは久しく會はないと思ふ。先生がボルの本家へ伺候する時に會つたきりの様だ。ハハ、悪口御免々々。紅顔の美青年健在なれ。

君 見 ず や 燕 は 歸 り 雁 來 る

◇ 【安達たま宛・十月二十七日】

本日十八日附の御見舞狀落手、厚く御禮申上候。其後大串(孝之助)君とは絶えて御無音に打過ぎ居り、ただ遙かに噂を聞きて幸福なる家庭の人となられし事を承知致し居り候ひき。しか

慶介君の手紙の中には、小さな繪か何かがあつた様だが、切り取られて居たぞ。以後氣を附ける!! と叱り置く。

俺の髯が大分問題になつて居る様だが、裁判の時には綺麗に剃つて好い男になつて行くから心配するな。誰れが髯面らんなんか法廷で晒すものかい。伊井敬ぢやあるまいし、馬鹿にするナ。ただ公判まで、獄中でこつそり赤銅色のモヂヤモヂヤ髯を生やして、その面を小便で寫して見て獨りニヤ／＼とやつてゐるところに、久さんの久さんたる所があるのだ。ウフ、可愛い男さ。

一昨日、本を宅下げしたら、今日は又、リーダーの(二)が入つて來た。ソレね、川口君。言はぬ事ぢやあるまい。監房に一ヶ月以上も先きでなければ讀まない本を讀んでおいて、他の讀みたい本が讀めない様な事は、實以つて閉口だからね。今後共、うまく願ふよ。お伯父さん。お酒の毒が頭に來たかナ。君の手紙の文章は、實に分り難い。以前はもつと旨かつたものだがナ。これもアル中ぢやないかね、用心したまへ。——と悪口は言ふものの、差入掛りや、本集め掛りなどは、實際厄介な仕事だからねえ、お察しする。

村木が一向に便りをせない由、先生、筆を持つたりすることは大嫌ひだからねえ、困つた奴だ。しかし體もよくないんだと思ふよ。先月、豫審廷で會つた時には、例の腹の脹れが體一面に廻つて來た様だつた。「自動車に揺られるのが非常に苦しい」と判事に言つてゐた。それに、大分寒くもなつて來たからなあ——まあせいぜい面白い講談本や、手紙などを出してやつてくれ。一度監房へ入つた男で、先生の温い親切を受けてゐない奴は少なからうからな。

『長谷川一家(高倉輝著)』は實に面白い。『寒山拾得』もいい。どうして中々立派な脚本だ。どうしてこれほどの作家が認められないかなア。菊池寛の『丸橋忠彌』なんか虫づが走るぢやないか。『寒山拾得』を一幕、守田勘彌と猿之助にやらせて見たいね。次の『坂』といふのが出たら、是非入れてくれ。楽しんで待つてゐる。高倉君は、小片『髯』に於いて、京都人の一種のタイプを實に深く温く描いてくれたが、こんどの、『長谷川一家』中の片鱗、衰び行く江戸ッ子なんぞも、大した腕を見せてゐる。漱石の『彼岸過ぎまで』と、鏡花の『草あやめ』との匂ひがする。だから俺は好きなんだ。

◇ 【竹内仲之宛・十一月二十八日】

暫らく御無沙汰した。二十日附の手紙拜見、君もあの當時僕のとばかりで、とんだ目に會つた由、多謝々々。そして、その時嚴られたさうだが、その経過はどうか。

折角送つてくれたサイダーがふいになつた様だが、その代り、もし命があつて何年かの後に社會の人となる事があつたら、その時こそ君の附近の温泉にでも遊ばせて貰つて、刑餘の保養でもさせて貰はふよ。

それから福田(雅太郎)の事に就いては僕は斯ふ思つてゐる。それが、木屑でも石の片らでも、神壇に祭られてゐる時には、それはそれだけの力を表現してゐるものだと。又、人間は意氣も大切だと思ふ。場合によれば一乞食の子の爲めにでも命を捨てる時がある。況んや……だ。

◇ 【翌月福子宛・十二月一日】

先月二十五日の繪葉書落手。また先達てはわざ／＼面會に來て下すつて有難う。厚く御禮申上げます。公ちゃんも、非常に丈夫さうだつたので安心しました。公ちゃんも變な處へ連れられて來て、變な嗜好をして居る久伯父さんを見せられて、大ぶ妙な顔をして居ましたね。三七郎も同じく驚いた様な顔付きでした。子供達の純眞な心に、餘り早くから強い刺激を與へるのは好い事でないかも知れませんが、しかし、それも、こんな嫌やな社會へ生れて來た不仕合せと子供達に諦めて貰ふんですね。尾行、檢束、家宅捜査などには馴らされて居ても、物事に驚異の眼を睨める時代なんですからね。——子供には些か氣の毒だつたが、囚の身の僕にとつては、純な子供の顔を見るほど嬉しい事はありませんからね。

あの翌日、初霜を見ました。それから木枯になりました。が、今日はまた、馬鹿に暖い小春日和です。そして僕も、のんびりとした氣持ちでアゴ髯をひねつてゐます。

久、久、鼠、(童話?)

キユウ、キユウ、ネズミ

キユウオヂサン

ネズミノヤウナ

ヒゲデキタ

オマンマタベテ

ホンヨシデ

トキドキ ソトラ

キヨロ、キヨロト

ココハ、カナアミ

オリノナカ

トキドキ ソトラ

キヨロ キヨロ

キミチヤン。

コレヲ、カアサンヤ、ネノチヤンニ、ヨシデモラツタダサイ。

◇

【近藤憲二宛・十二月二十四日】

十三日附の手紙見た。禁止はとれても、手紙は一々裁判所に廻ると見えて、随分遅滞する。布園有難う、俄かに大盡になつた様な氣持だ。布園なんか、決して心配してくれるなといつて置いたのだが——しかし入つて見るとまんざら悪い氣持ぢもしない。ただ、難役なんか、羨やましさを顔をして眺めるのが、いささか氣が引ける。軽くて、随分温かい。厚く御禮をいふ。川口慶介が飛び出してつた由、それもいだらうと思ふ。社を大改革やつて、うんと腰を落ちつけて根強く戦ふといふには、あゝいふ人種は先づ不向きだ。僕は全然新しい人が二人ばかり来てくれる、第一期の「労働運動」の時のやうな態度で新陣容が整つてくれればいいが、アと、空想してゐる。それには「労働運動」の態度をかなり變更しなくばなるまい。村木（源次郎）は嫌やがるだらうが、僕は「労働運動」にもう一度還る必要があると信じてゐる。他にも澤山反對者はあるだらう。そして、或は君もいくらかそこまで還るには反對かも知れないと思ふ。しかし大杉の「白紙主義」は單なる白紙ぢやなかつた。白紙に書いて行くものの力——創造力を信じてゐた。大杉の白紙は、のらくら學生がいろんな芥みみたいな學説を筆記する爲めの、落書の爲めの白紙ぢやなかつた。それは労働者自らが、血と骨とを以つて書き記して行く行かねばならぬのぢやあるまいか。大衆と共に書け、それが如何に遅くとも！そして、如何に書くべきかを強く示しつつだ。「労働運動」よ、白紙に還れ！そして大衆に提供せよ！僕は、雑誌「労働運動」に就いては、斯う願つてゐる。そして、殆んど君一人となつたことは、この爲めに却つていい様に思ふんだ。しかし、君一人ぢや勿論駄目だ。協力者が要る。が、その協力者を求めるに就いて、決して今までの情實に捕はれるな、附近の批評なんか氣にするな。新らしい人、或は更新せんとする人が必要だ。それは「労働運動」の更生によつて始めて得られる。

僕はかう考へてゐる。これは、やはり金網越しの妄想に過ぎないだらうか？ 近藤君！本年の通信は、たぶんこれがおしまひだ。面會に来てくれる必要はない。時々手紙は欲しいね！ いろんな人から！

◇

【望月桂宛・十二月二十六日】

皆さん——ハゲ君。細君。しげ君。きみ君。富君。ケイ君。そのほか、望月家の炬燵に集る人間よ！そして、庭の石佛君、山茶花君よ！少し早いが、新年お芽出度う。吾々の爲めに、過ぎ去つた年に榮光あれ！ 吾々の爲めに、来る新年に自由あれ！！ だ。

處で労働運動社に對する——即ち現在に對する——又將來に對する——感想を一つ聞かせてくれないかねえ。何んだか氣がかりだよ。娑婆の事は、娑婆の人間に任せて置け、レンガの中の隅つこで、何を妄想し、何をブツ／＼言つてゐるのだ——などと冷やかすべからず。俺の妄念は、今の俺の生活だ。今の俺の生命だ。レンガの底で冷めたくなるまで妄念に執着するぞ。妄念……か！ハハ、公ちゃん、怖がらなくつても好いよ。ちと年頭らしくないねえ。その代りこの次には、新年の日ざしを浴びて雀が囁つてゐるやうな手紙を書かう。

◇

【山崎今朝彌宛・十二月二十六日】

少し早い、新年お芽出度う——

昨日、沼引事がフト僕の事を思ひ出してくれたと見へて、久しぶりにお呼出しに預つた。そして、本年中に終らうと思つたが、事件がこんがらかつて、ついつい面白くなつて行くものだから、やはり來年に延ばす事にしつたといふ、年末の挨拶があつた。

處で、御兩人の御盡力も、従つてまだ／＼ゆつくりお願ひしていい譯だが、しかし、餘り「面白く」なからかつて『行く様ぢや、僕は「けり、かな」と俳句をひねつて、うかれてばかりも居られないから、場合によつては、先日お話しあつた「豫審中の證人申請」もやつて見やうかと思ふんだ。その他、事件に對する判斷も些か聞いて置きたいと思ふから、春になつたら折を見て、一寸面會に来て欲しい。布施さんでも、どちらでも結構だ。都合の好い方の人にお願ひする。

此の前は「大阪と東京とは別々にやる」との判事の話しだつたが「こんどは何うなるかも知れない——」と、變つて來た。俺の事件と、あの事件とをこつちやにされちや……

◇

【堺利彦宛・一月六日】

先づ御芽出度う！ 今年も六日経ちました。

「高津（正道）君の細君の葬式」とありましたが、多代子さんが死なれたんですね。あんなに珍らしいほどの、奮闘的な内助者だつたのに——では高津君も、子供を抱えて、さぞ落膽と困惑とに陥つてゐることせう。宜しくお傳へ下さい。

「年が又暮れる、僕は五十六になる」といふのを見て、「ヘエ……五十六！」と急に貴君が老人になつた様に感じましたつけ。しかし、考へて見れば、實文社の玄關番だつた僕が、もう三十三ですからねえ。が、貴君の年まで僕が生伸びるとすると、まだ二十六年ありますねえ。いや、大いにABCからやつて置きましよう。何かに、無期でさへなけりや……

貴君も大切にされて下さい。再び社會でお目に懸かれたら、日向ぼつこでもしながら昔噺しのお相手にならましよう。

【江口漢宛・一月十日】

「一茶旅日記」有難う。今まで知られてゐない、或は僕の知らなかつた句も大分あるやうだ。初めの石版は實に嬉しい。一茶の字の馬鹿にへた蕪なのが特に気に入つた。が、句佛の讀のおもひして」といふ、あの讀句は何んだい。だいたい句佛上人なんて奴に題句を願ふなんて、晋風といふ男も、きつと可なりな俗物だらう。蕪太か梅室あたりの句集に相當だ。成程、一茶は佛教信者だつたやうだ。が、彼の宗教は、「轉び寝のその身そのままあけの春」だの、「おらが世やそこの草も餅になる」などの境地にあるので、祇園新地で藝者を抱寝しながら「ありがたや祖師は紙衣の九十年」などと、緋ぢりめんと紙衣との一視同仁教は一茶の知らない境涯だ。

その信州から出た文學者だといふので、露伴と藤村に序文を頼んだ心理なんかも、かなり晋風といふ男の根性が見えすいてゐる。が、藤村の序文はよく書けてゐる。流石に一茶の人物をよく見てゐる。晋風の序文「旅日記について……」はまだよく讀まないが、

あたふたに蝶の出る日や金の番
一つでも鳴いて行くなりかへる雁

といふ句と、

御 櫻 御 梅 の 花 松 の 月
片 里 や 宿 な し 乙 鳥 暮 い そ ぐ

といふ句とを比較して、前句は後句に比較すると一段見劣る。といふのは、僕は反對だ。僕は前句がずつといふと思ふ。

ハハ……變なものを書いた。無爲に苦しむ獄中獨語と笑つて讀まれたし。

今日はかなり大雪だ。今朝、

飢え 狂ふ 態に 吹雪の 鴉かな

といふ即興を得た。鐵窓を隔てて空地があり、その先きに例の監獄塀がある。が、その直ぐ外で、子供の遊ぶ聲が時々聞える。正月には羽子の音もした。

迷 ひ 來 し 稔 よ 獄 屋 の 霜 の 上
樹 は 冬 を 眠 む れ ど 爪 の 骸 骨

◇ 【長沼富宛・一月十五日】

富君。この間は面會を有難う。大して搜せてもゐないぢやないか。關東中で最もヒドイとの噂のある浦和(刑務所)を卒業して、そしてあれだけの元氣があれば何より結構。まあ、大い

にやつてくれ。しかし、この間は妙な男と一緒にたつたね。勿論面會所で會つたのだらうが、君とはいひ取り合せだつたよ。奴は、狐を馬に乗せたやうな男だし、君はチンコロが馬に乗つたやうな男だし、フウフ、と、怒るな。君が怒ると、猶ほさら下口びるが飛び出るはさ。——それ、その通りだ。言はぬことかい。

富 の 書
と び 出 し た 下 口 び る の 寒 さ か な

◇ 【雜賀智之宛・一月二十日】

潤牛とは、珍らしい男から便りがあつたものだ。早速返事を出さずんばあるべからずだ。さて潤牛。

君もとうとう田舎ベいの齒醫者先生になつた由。それを慶すべきか、將た弔すべきか、などといふ主義臭い議論はやめにして、先づは芽出度いと、祝つてやらう。まあ、確かりやつて見たまへ、齒醫者商賣を。どうせ金儲け人種ぢやないから貧乏醫者にきまつて居やうが……

しかし、貧乏醫者でも、齒醫者の看板を上げたとなると、蠅の様な主義者や食連が襲ふかも知れないぞ。蠅共に舐められない用心をしる。東京や大阪から遠くて、幾分か仕合せだ。

あの當時、既に決つて居るとかいふ話しだつたワイフは、勿論一緒に居るのだらうなア。どうだ、結婚生活の味ひは——ワイフの甘味と、生活の辛味とを科學的に、藝術的に一べん白狀して來い。

「取引……」て、何の事だい。齒醫者先生の取引とは。齒齧の掃除や、齒の入替へは、その下駄たると人間たるを論ぜず、商取引とは言ふまい。尤も、日本の小作人を純然たる企業家だと論ずる博士もあるから、その見地からすれば、それも亦確實に商取引ではあるがナ。

下ノ關には、好い同志がまだ一人二人ある筈だ。搜して見給へ。そして、海峡を越えた、對岸の空氣中にも面白いものがあるから、見落すな。

◇ 【勢働運動社宛・一月二十四日】

とうとう村木は死んでしまつた！

看守長の話では「昨夜、社に到着後まなほ餘命を保つてゐた」と、今朝の新聞は報じてゐるさうだ。しかし、僕が彼との永別を告げた時には、既に彼は死んでしまつて居た。ただ、その肉體のみが、最後のあえぎをあえいでゐたに過ぎなかつた。しかし、そのあえぎも、もう今は完全に冷却境へ入つたことと思ふ。

あ、僕が病監へ馳せつけた時だつた。彼は薄暗い陰惨な一室に、やや濁つた冷たい眼を大きく見開いて、何物かをちつと見つめてゐた。僕はにじり寄つて、彼の手をしつかりと握つた。

そして、彼の眼の中を見守りつつ、彼の顔の上へのしかかるやうに僕の顔をすりよせた。あゝ、けれども……けれども……もう彼の眼は見えなかつたのだ。僕の全身は、わなわなと慄えて来た。涙がにじんで来た……。

『村木ッ……僕だ。……僕だッ……分らないか……』

彼の眼が、かすかに動いた。顔の筋肉が、ビク／＼と引きつれた。そして、眞暗な洞窟の中から響いて来るやうな聲が、その口から漏れた。

『ウ……た、たれた、君は……。君は誰だ。……和田だ……』

『和田だ……和田久だ……』

『和田……和田……ウノシ……和田君……解つてゐるさ……』

僕の涙が、握つて居る彼の手の上に滴つた。と、

『泣くな。……ない……たつて……しよがあるか……』

ボツン……ボツン……と、暗い洞窟の中で水が滴るやうな、その冷い朗らかな聲……ガチャガチャ、コツコツ、と帯鋤と杭が廊下で動いた。布施辯護士が顔を突き出した。そして、

『何か、言ひ残したい事がないか訊いてくれ給へ。』

といふ。僕はまた、顔をすりよせた。

『何か、言ふことはないか……』

黙つてゐる……暗闇の洞窟の中がシーンとなつたやうな空気が漂ふた——と

『ウ……なんにも……ない。』

ボツン……ボツン……と、二た滴。

いま、僅かに、これだけの事しか書けない。しかし、監獄の門を出る迄の様子は、近くきつと書いて送る。

僕は、大杉の時にも渡邊の時にも泣かなかつた。親父の時も泣かなかつた。が、こんどは泣いたぞ。村木はあの體だ。どうせ、今度は長くはあるまいと思つてはゐた。……が、僕は口惜しかつた。涙が體中から、しほれて来た。

悲しいんぢやない……口惜しいんだ。……せめて、公判廷に起したかつた。まだ、元氣だとばかり思つてゐたのだ!!

◇ 【近藤憲二宛・二月二日】

一月廿八日午後六時を以つて、漸く豫審終結した。その内、決定書も來、公判日も確定するだらう。調書は、四寸厚みのものが、四冊ある。それに、大した證據品だ。

調書の中には、中々趣味の深いものもある。但し、僕は極く平凡だがな。その二三は、是非寫しを取つて、保存して置いて貰ひ度いと思つてゐる。

新聞も、禁止が解けたら、背景の大きく多趣なのを面白がつて、書き立てる事だらうと思ふ。奴等には、ただ事件が面白くなりさへすればいいんだからなア！ 嫌やな野郎共だ。

被告は、都合、四人だ。その中、君が顔を知つてゐるのは古田君だけだ。

豫審廷で四人が顔合せをやつた處、古田(大次郎)君は肥り、俺は瘦せたと決定した。實に怪しからん。村木が生きてゐたら、少しは俺の方が見栄えがしたらうに、——そう思ふにつけても残念でしかたがない。

◇

【延島英一宛・二月三日】

君からの手紙は、丁度潮死の村木を送り出して監房へ歸つた時に受取つた。だから、すぐ手紙を書く筈の處が、今日になつた譯けだ。

君からの手紙はこれが始めてだ。が、粗製濫造でなく、極めて上等の手紙だつたので「延島の奴、いくら手紙をやつても返事もしやがらない」といふ腹の中のブツ／＼聲がさあつと下つてしまつた。と、大いにおべんちやらを降りかけて置く。いや全く、手紙らしい手紙を初めて受取つた様な氣がしたよ。誰れも、何事も知らせてはくれないんだからなア……「婆婆のことは、もう君には用事がない」とでもいはんばかりに——。

が、君はすばらしい奮闘だネ——。赤色……組合國際同盟の解剖」の怪氣焔は、さもさうず、さもあらなん、感心したが「二月月上旬に蘇譯書を出版する」には、アツと驚嘆したね。君の意氣や、想見するに難くはない。嬉しく思ふ。著書出版は初陣だ。成功を祈つてやまない。

しかし、「共產黨宣言の種本」といふ名は奇抜だね。勿論、その内容がその意味の事を論じてゐるのだからけれども、確かに延島式の題名だねえ。日本の冷飯喰ひ奴、恐れ入つたかッ」と言つてゐる様だねえ、既にその題名に於いて、呵々。

熊(水沼)君と北浦(千太郎)君とが(ロシアから)歸つて來た由。しかも、主義に於いて兩極端を現じてゐるとは面白い。随分土産話があるだらう。聞きたいものだね。ロシア革命の最中に、賣文社へ二人のロシア人が訪ねて來たことがあつた。そして、一人はケレンスキー派で、一人はボルセヴィキだつた。二人はニコニコ話しながら「吾々二人は、ロシアへ歸つたらお互ひに殺し合ふんだ」などと言つてゐた。——君の手紙の、熊君と北浦君とのことを讀んで、フトこの事を思ひ出した。

總聯合が略ぼ成立した由、面白い／＼。……未だ我々の主張とは遠いもの、……」なのは當り前だ。これからだ。これからだ。あせらず、底の方からぢりぢりとやつてくれ。技工、芝刈連はどうしてゐるかな。ウンと下つ腹に力を入れ直して起ち直りさうかな。

「革命的冒険に失望した大衆は改良主義へ行きつつある。それは當然幻滅を経験するだらうが、我々も深く反省したい」の一言は、双手を挙げて賛成する。實際、我々はその點を深く反省したい。

ボルは理論的であり、我々は實際的だつた。といふのは、彼等は學說一點張りであり、吾々は、労働階級の感情に深く即してゐたのだつた。が、其後、彼等はその學說を實際化し來り、吾々はその感情の純化に多く耽りつつあつた。理論學說も、それが實際問題の中へ深入して其處から血と肉を附加し來るや、次第に大衆の中力となつて生きて來る。労働階級の感情に深く即することは、勿論實際的である。謂ゆる大衆的である。そしてその限りに於いて我々は正しかつたのだ。けれども、その大衆的感情は、戦ひの訓練を経て「純化」されて行かねばならなかつた。しかも我々の「感情の純化の主張」は、哲學的にまで進んで行つた。そして、それと同時に、いつの間にか大衆に裏切られつつあるのに氣付かなかつたのだ。——結果は、彼等は學說的に實際的となり、我々は「感情の哲學的純化」へ——即ち理論的になつたといふやうな逆現象を呈しつつあるのだ。現在では——

僕の、この言ひ方は少し極端であるかも知れない。しかし、我々が自らと省みることに眞實である限り、この傾向の事實をかなり認めざるを得まいと思ふんだ。

我々は、この點を深く反省したい。(感情の純化を否定するにはあらず)

我々は、労働階級の感情に即することに於いて實際的であると同時に、その感情の因つて來たる經濟的現状に即すること——即ち實際的なあらゆる戦ひを共に闘ひ、その戦ひの諸狀態に即して立てる——を等閑してはならないと思ふ。殊に僕は近頃、政治的問題から來るところの諸影響を輕蔑してはいけない」とさへ考へつつある。

君が財政に關するものに手をつけだしたとはいふことだ。僕はそれに、更らに金融問題を加へて研究したいと思つてゐる。(最近の金融界の傾向は財政的になりつつあると)

僕の事件以來、變な自稱アナキスト連が來なくなつたことは、とんだ儲けもの、怪我の功名をしたものだと思ふさせられる。

◇ 【中村しげ子宛・二月十四日】

ドテラ有難う。確かに差入れになつて毎日暖かく着てゐる。この間炬燵で尻をあぶる夢を見たつて。さあての後の寒むかつたこと。呵々。

昨日、江川(菊次郎)君と一緒に、珍らしくも千葉の(渡邊)精一君が面會に來てくれた。相變らず精一式の、トボケた様子を喋つて行つたよ。江川君は例によつて「悲哀」そのものの様な限附きをしてゐたし、精一の奴は、土の中にもぐつて居た蛙が、俄かに掘り起されたたともいふやうな面ヲ構えをしてゐた。

精一君が、先達で歌集を入れて來たので、その禮のついでに僕の歌を二三書いてやつたら、こんどは向ふから大きな原稿用紙三枚一杯に、詩を書いて寄越した。堪らないほどキザな詩だ。先づその題からして振つてゐる。曰く「女性の文字類」聖澄に極まる生命音」といふんだからなあ。

土をはなれ、乳を忘れ、妻えさうな、うめき、狂騒音、せかれ、阻まれ、さいなまれ、嘆かひ、吐息、哀寥、憂愁、暗鬱、かひなさ、辛さ、せつなさ、やるせなさ、いたましき。

こんな句の連續だ。これが百姓たるものゝ寢言なんだから恐れ入る。泥蛙が、一瓶五錢の香水を自分の顔中にふりかけて、紅いハンカチを首に巻いて跳つてゐるやうな詩だ。スガモで首を吊つた後藤(譯太郎)君のやうな狂人には、強く或る種の深刻味に打たれるが、精一のやうな種類の狂人には、ただズベツと憐ピンとがあるのみだ。誰れか、少し奴の魂をどうかしてやつてくれないかな、呵々。

此處まで書いて裁判所へ行つて來た。今歸つて來た所だ。そして、冷たくなつた飯に水をぶつかけて、がさ／＼と掻き込んだ所だ。もう六時近いと見えて窓外は眞暗だ。

源ちゃん(村木)の死に對する僕の氣持は、勞運へ送つてある、あの日の歌日誌を讀んでくれたまへ。その中に、僕の氣持の總べてを表現して置いたつもりだ。

◇ 【望月福子宛・二月十六日】

二月七日附の御手紙有難く拜讀しました。この手紙の着く頃には、たぶん信州から歸宅されてゐるやうと察し、些さか駄筆を弄さうと思ひます。

肌衣二枚、厚く落手しました。お忙しい處、どうも御世話でした。先日、しげ子君が面會に來てくれた時「何か食べるもの——」との事なので、ハムをお願ひしました。が、それを一日おいて後にわざ／＼持つて來て貰つて、おまけに勤めの時間を割いて面會までしてくれたので、大いに恐縮しました。しかし、お蔭で御本人は大喜びにて、久し振りのハムで腹の虫を驚かせてやりました。

あのお手紙は、キミちゃんに對する、また自然美に對する貴女の純情が、實によく溢れてゐると思つて、愉快に讀みました。あらゆる文章のうちで、手紙ほど、その人の性質がはつきり現はされるものは他にないからうと思ひます。貴女からのお便りには、いつでも必ず「ほんとに、ほんとに、おいとひ下さい」といふ一句があります。又、しげ子君からの手紙には「……といつちや可笑しいけれど」といふ竹を割つた様な句がきつと使つてあります。僕はこの各々の短句の中に貴女方二人をはつきり見出すことが出来るやうに感じます。何方がこの片句を取り替へても、嘘になります。それほどよく、この片句には、二人の性質が愉快に現はされてゐる様に、僕には思はれます。

『きみ子と二人きりでつまらぬわい話したり、歌をうたつたり、ほんとにこの頃は可愛くてなりません——』といふ、貴女の氣持ちは、僕の貴女に對する羨やましきまでの尊敬の一つです。僕はよく、貴女の家で、貴女が針仕事の眼を絶えずきみちゃんに向けられるその眼の中に、または、御飯を食ふながらきみちゃんを楽しさうに見守つてゐられる貴女の體中に、その満ち溢れるやうな愛情を羨やましく眺めたものです。それは、僕にとつては、妬ましいほどに羨やましいものでした。全くです。

僕は、恥かしながら、さういふ純な愛情を知らず知らず育つて來た男なんです。勿論、母も父も僕を可愛がつてくれました。が、父はまるで人生を悟り済ました「面白いお爺さん」に過ぎなかつたし、かんちんの母は、非常に執着心の強い、負け嫌ひの、氣の勝つた人でした。そして父は、苦しい勞働の餘暇に「淨瑠璃」をうなる事が唯一の楽しみで、子供の教育は母まかせでした。父は「よくよくよするな。面白く暮さんかい。世の中はなる様にしかならんもんや」といふ主義であり、母はその正反對だつたのです。

國の明石には澤山な親戚(母方)がありました。そして、皆な相當に暮してをて、僕の母に救つて貰つたものや、育ててもらつたものが殆んどでした。が、母との仲は皆な面白くありませんでした。負け嫌ひの母は、その人達に世話になるのを嫌つて、僕の父の所へ再嫁して僕を生んだのです。その時、母は四十歳でした。そして、僕の家は極度の貧乏でした。

母は僕が四つ五つの時分から、夜となく晝となく僕に言ひ聞かせました。

『久太郎や、お前は早く偉い者になつて、親類の人々に、それ見たか、と言へる様になつておくれ。お前には澤山な伯父さんやお伯母さんや、殊には、義理の兄や姉が澤山あるのやぞ。けれども、皆んな薄情な奴や、鬼みたいな奴や。わしのものを皆んな取つてしまつて、わしをこんな目に合せよつたのや。わしは年を取つても、あんな奴に養つて貰ひたうない。ただ、わしの頼りにするのはお前だけや。お前は可哀相やけど責任が重いものやぞ。早く大きくなつて偉い者になつておくれ。薄情な親類の奴等を見返へておくれ。わしがお前に寄りかかるのを、親類の者は皆な嘲つてゐるのや。どうぞ、あ奴等に、「それ見たか」といへる様な、偉いものになつておくれ。お前のお父さんは、大阪の辰巳屋といふ、百萬長者の家に生れた人なのやぞ。そしてお祖母さんが死なれる時に、「……お前が成人したら、お父さんになり替つて、大阪へ出て偉い商人になる様に、よく言ひ聞かせておくれと、わしに言はつたのやぞ……』斯ういふ言葉を、日がな間がな、注がれて育つて行つた僕は、「いまに見ろ、親類の奴等に」泡吹かせてやるから、いまに見ろ——』といふ様な強い敵愾心を心中に生長させて行きました。母は、その子供に對する愛情の中へ、自分自身の社會(殊には親戚)に對する戦ひの心を燃やしながら僕を愛してくれました。

僕は、六つか七つ位の時から、日々に貰ふ「五厘」の小使ひを貯蓄し始めました。近所の

使ひ歩きをして、その貰つた駄賃を貯蓄し始めました。その金が僕が學校へ行く費用になつたのです。……學校の席順は常に二か二でした。記章を買つて胸にさげてゐました。卒業の時には、いふも賞品に次ぎの學期の本を學校から貰ひました。それは、一つには僕の家が學校の前なので、先生達ちがその貧乏振りを知つてゐてくれたからだと思はれます。……が、こんな事ばかり並べてゐても限りがありません。しかし此處に斯う書いてゐる中にも、學校が退けてから、そつと學校の運動場の塵捨て場へ行つて、鼻緒の切れた草履を拾つて歸り歸りした、其頃の小さな僕の姿が眼先きに浮んできます——。

僕は十二歳の歳に、自ら進んで大阪へ奉公に行きました。早く偉いものになりたい、金を儲けたい——といふ心持が、ぢりぢりして、落着いて學校へも行つてゐられないやうな氣持だつたのです。

即ち、貴女がきみちゃんをちつと抱きしめてゐるその愛の純情と、私が親達ちから惠まれて來た「愛」との間には、よほどの相違があるのです。「實」が違ふのです。かといつて、僕は僕の母の愛情を貶す心は毛頭ありません。母親の僕に對する當時の氣持——それを僕はよく理解する事が出來ます。そして、母の純情を、さういふ風に誘つた處の社會關係——私はそれを燃ゆる眼でちつと見つめてゐるのです。

其後、僕は種々な方面に轉々しました。いろんな家庭の人ともなりました。が、「ああ、美しい家庭だ、羨しい親子だ。羨ましい夫婦だ」と感じさせられた時はほとんどありませんでした。要するに、そんなものは、人間の空想の中にのみ生きてゐるのだ、と。そんな氣持になりに勝ちました。

岩佐(作太郎)君は、よく「十八を失つた恨み」を論じます。しかし、僕は、十八時代の外に、大切な子供時代、天真爛漫な樂しさを失つた様な氣がします。僕は貴女の御存じの通り、子供が大好きです。殊に天真爛漫な、朗かな子供は、見てゐて涙が浸むほど好きです。それは、一つには、僕自身の失つた樂しい子供時代をそこに見出し、憧憬れるからだと思つてゐます。

貴女は、自分の「弱さ」を悲しんでゐられる。が、人間には皆なそれぞれ持つて生れた天分があるものです。そして、その天分を最もよく發揮する事が、人間は一等大切な事です。

島崎藤村は言ひました。

『弱いのが決して耻ではない。その弱さに徹し得ないのが耻なのだ』と。

◇ 【近藤憲二宛・二月十七日】

十五日附の手紙見た。頭が痛い、や、眼の悪くなつたのは、確かに過勞だねえ。奥山さんに診察して貰つて見ろ。きつと「毎日うまいものを食べて、靜かに寝て居なさい」といふに決つてゐるから、呵々。しかし、戲談ぢやないよ、よく養生してくれ。

江口君の所で「彼女の歌」を見たつて？ 怪しからぬ奴だナ。そんなに活動すると猶ほ眼が悪くなるぞ。どうだ、彼女のことは。君の想像と一致してゐたかい。恐らくは、豫想に反したらう。

豫審の方も、こんどこそは、いよいよ終りになるらしい。豫審調書が發表になつたら、その内容が餘りにゴタゴタしてゐて、八百屋店のやうにさらけ出してあるのにびつくりするだらう。地方評議會が總同盟と分れたといふのは、ボル連が愛憎を盡かして總同盟を飛び出したのではなく、恐らくは、總同盟から嫌はれて追ひ出されたものと思ふ。さうぢやないかねえ。それは兎に角、總同盟は、よほど變になりつつあると見えるねえ。大阪方面に於ける、總同盟内の荒畑（寒村）分子はどうしてゐるのか。あの方は無事に活動してゐるのかな。

思想團體の振はぬのは「要するに組織のないことだ」といふのは至言だね。が、そればかりでなく、一方、精神的にも多少だらけてゐるのだらう。さういふ時期があるものだ。

パンフレット、大いに結構だ。が、古雑誌を漁つたつて仕方があるまい。新しく書かねば駄目だ。「理論的原則」ばかり振り舞はして居たつて仕方がない。よしそれが實際問題にした處で、日本の現實とピッタリ合つて居なければ一般向きにならない。少數者の研究資料になるだけだ。それが必要だが、今、なにより必要なのは、日本に於ける、運動の最も可能な方法に就いての宣傳。その實際問題の解釋（平易な）。といふやうなのが一等大切なんぢやあるまいか。「政治運動」に反對するにしても、「失業問題」を書くにしても、理論よりも、實際のものに即して書かねば駄目だ。僕は、それを深く信ずる。

「ボル共は「經濟關係の變化」からのみ十露鯨をはちいて、その經濟關係の進化為労働者の意志を動かし、更にその労働者の意志が經濟關係の進化為逆作用する所の力を輕視する。が、反對に我々は、その労働者の意志、その精神的な働き方にのみ重きを置いて、それを働かす根本動力たる「經濟組織の變化」に對して、餘りに冷淡だと思ふ。

雑誌の記事だつて「赤色組合の解剖」も「アナキズム問答」も勿論結構だが、日本の資本主義經濟が、今如何に變化しつつあり、それが労働運動なり、思想傾向なり、政治關係なりに、如何に作用しつつあるかといふことは、労働組合の實質が如何に成長しつつあるかといふことを、色目を離れて、ハッキリ觀察して行くことが、より大切ぢやあるまいか。そして、そのしつかりとした觀察の上に強く立脚して運動を進めて行くといふことが……。

◇

【布留川桂宛・二月二十日】
北浦（千太郎）君が歸つて来て、君も嬉しだらう。が、北浦君はかんかんのボルになつてゐるといふぢやないか？ しかし、その事に依つて、二人の親友としての感情を損ねざらん事を祈つてやまないねえ。同君によろしく傳へてくれ。僕もいまは、ボルの本を盛んに讀み返し

つつある。そして多くの點を反省させつつある。

「社會の事を書いて靜かな氣分をこはすやうでも面白くない」といふが、そんな遠慮はいらないから、どしどし監獄的の無爲氣分をこはしてくれ。禪坊主の言ひ草ぢやないが、俺の氣分は靜かして然かも東西南北吹き通しだ。どんなものでも勝手にお通りなさいだ。が、見逃がしはしない。氣に入らぬ奴が通ればとつ掴まへて引つぱたいやるまでの事よ。呵々。

「面白くないことはかたしだ」といふが、それを面白くないといつて、ただちつと眺めて居るんぢや、面白くない奴が一足殖えた、といふだけの事に終るぞ。その面白くない事に對して、一つ戦ひを挑んで見る。戦ひには自己の力の充實が要る。自己の力の充實の中には面白味が溢れてゐる。そして、戦ひの相手たる「面白くないこと」の中にも、その戦ひから受ける幾分の力の充實が現はれて來るものだ。

◇

【布留川桂宛・三月六日】
治安何んとか法の中へ新たに芽を出した過激法案の三度生えは、もうとうに可決された事と思つてゐたら、まだゴタ／＼やつてゐるんだつてねえ。御苦勞なことだ。

この間、豫審へ行く途中で外を覗いてゐたら、四谷見附に「普選斷行國民大會」とかいふ大看板が眼についた。ホー！と思つて下の方を見ると、政友會何んとかしてあつた。普選も既に政黨屋の玩弄物になる時期がやつて來たのだな、と思つて、自動車の窓から眺めながら獨りほ、笑んだ。

一方、日本でマグダナルドやヘダアソンを氣取らうとする男は、この波に、怪しげなたらひ船でも浮べてゐるのかい。それとも、ただ岸に立つて、船の着くのを眺め待つてゐるのみなのかい。

とにかく喜劇の序幕は始つてゐるだらう。

◇

【山崎今朝彌宛・三月九日】

決定書見て下す事と思ふ。全然問題でなかつた正力（松太郎）のことが加へられ、且つ僕と村木との間の相談に過ぎなかつた本事件が、他の三人も共に相談し合ひ、僕等の事件のために、他の三人の人々も種々の行動をとつた事に豫審は決定されてゐる。要するに村木と僕とが、その間違ひを全然否定してゐる事柄が、他の人々の陳述中の破片によつて全部合議の上のものと思はれて了つてゐる。

僕に「爆弾を使つたらどうだ」と云つてくれた古田君のみは、僕等の事件を推察して居てくれた。そして、一寸した手傳ひもしてくれた。然し他の二人に至つては斷然何等の相談もしない。調書を讀んで貰へば分るが、事件が非常に混雜してゐるので、新谷（興一郎）倉知（啓司）の

二人にも間接の關係は生じてゐる。が、それは尾に尾を引いて自然に生じた些細な關係であつて、そこには何等の相談も合議もないのだ。僕は、この關係の性質を必ずはつきりさせたいと思つてゐる。

◇ 【江口漢宛・三月十八日】

暖かくなりましたねえ。が、此處は地震以後荒れはててゐて、草萌えを見る事も出来ず、近くには、木の芽の匂ひもしない。うらぶれた梅が所在なく立つてゐるきりだ。が、空は實に美しく暖かさうだ。藍が深くなつた。

今日「現代文學選」を宅下した。そして、いま「荷風全集」を読みつゝある。荷風は近頃のものよりも、この「あめりか物語」『ふらんす物語』時代の方がいい様だね。此の間、望月のしげ子君が来て、近日君の處へ行くとの話だつたから、漱石全集の「行人」の載つてゐるのを頼んで置いた。

それから、ドテラを永々有難う。随分汚れたらう。そして、カギ裂きまで拵らへた。これで紳でもあると、ちゃんと洗つて返させる處なんだが、まあ、萬事よろしく御願ひする。何かにつけ諸君の御世話だ。

新聞に豫審決定書が出た由、いやはお恥しい次第だ。しかも、あれだけのものではなく、もつと種々のくだらない内容が、ウンと打ちまけられてゐるんだ。下手な八百屋店の様にねえ。近況は如何なんですか。何か書けますか。『戀と牢獄』以後、力の這入つたものが書けましたかな。

新しい「脚本集」があつたら借してくれませんか。默阿彌全集の讀み残してゐるのを見たいのだが、繪があるから不許可だらうなア——。

◇ 【界利彦宛・三月三十一日】

「一茶全集」には、思ひ懸けない香水が秘め籠めてあつたので、あつと歡喜の聲を挙げました。いまもぶん／＼と匂つてゐます。昨夜もそれを枕上に開いて夢に入りました。

思ひきや香水に酔ひ春の星

垂水の山川（均）さんは、お變りもありませんでしたか。僕の生れた明石は、あそこら僅かに二里餘りしかありません。子供の時分、あの邊へはよく遊びに行きました。驛の傍にある「海神社」のお祭には、あの邊りの濱邊の者は皆なお詣りします。「海に取られない」お守りを海神社で受けて、それを竹の皮に包んで、ひもで肩へはすかひにかけます。それを肌につけて、夏、海へ飛び込むのは實に嬉しかったですね。あの邊は、鯉が多くてよく人間が食はれるので、殊にあの神様は大流行でした。尤も、私の友達で、あのお守りを肩にかけて、大きな鰯

にすい附かれて死んだものもありましたが。呵々。垂水の沖に、赤い小さな燈臺があつたでせう。あの邊はベラといふ魚の村落で、僕は明石から船でよく、あそこへベラ釣りに行つたものでした。

◇ 【近藤憲二宛・三月三十一日】

岩佐老人、アメリカに行きて「初めて日本人の色の太いに黄なるを發見し」近藤憲二、雪の植物園を訪ねて「白き梅の花の甚だ黄なるを悟る」。我れ今獄中にありて、碧巖録に一句を見出しぬ。

曰く「銀碗裡ニ雪ヲ盛ル」白きが白きにあらす、黄なるが黄なるにあらす「誰れか狂へる」喝ッ。

どうだ、何のことだか解るか。俺自身にも、少しも解らない。解らないから面白味があるのだ。唯物論者はこの面白味を解せず、素より、くだらないことだ。が、くだらないから面白いのだ。漱石の「三四郎」の中に、廣田先生の煙草のふかし方を形容して、「鼻から哲學を吐く」といふ句がある。間の抜けた様な變な學者の形容が實に面白いと思つた。

ラヂオのこと、全く、ビツクリ仰天した。眞當かい。何んだかウイリアム・モリスの「理想郷」の話を聞かされてゐるやうだナ。呵々。も少し詳しく説明しろよ。その器械の値段だの加入者間の組織だのを——。

俺の歌よりは、俳句の方が好いといふ評判だつて？ さうかなア。僕は、此頃歌を大いにうぬぼれてゐるんだがなア。俳句の方は、自分で悪い處が目について仕方がない。尤も、自分の句のものの足らなさを感ずるだけ、それだけ歌よりも句の方が、マシなんかもしれぬと考へられはするがな。しかし、俺の歌も中々いゝんだがなア——ウフフ、。

公判が、五月二十一日だつて。やれ、やれ。早く来てくれ。早く来てくれ。

◇ 【渡邊精一宛・四月二日】

君の二十二日附の手紙の返事也。

▽君の言ひ分、合點が行つた。この手紙、些さか君自身を主張してゐるので、見るに足る。▽牢獄生活でイラ／＼してゐる人間には、農夫の平凡味の尊さが分らない、となればそれまでも也。ただ僕は、牢獄生活をしてゐればこそ、今まではただ何んともなく見過して來た、極く平凡な物象が、こんなに鮮しく多趣味に眺められるものかと思ひつゝある事を告げて置く。▽僕も牧水の歌は好きぢやない。が、僕が例に挙げた歌は、實に平凡で、すら／＼してゐるのが僕に氣に入つたのだ。そして君の歌が言葉だけを飾つた無内容な平凡無味なものなるに對し、あの歌が、同じ平凡でも、否、君のよりはより平凡でも、しかもその中に眞實ななら

かな力が溢れてゐる事を示し、以つて平凡の他山の石たらしめんとしたのだ。「尊嚴をおかしたとでもいふ様な異常な神經のキンチョウ味」なんかは、素よりあの歌にはない。ただ何んとなと、親しい様な氣持ちでちつと眺めてゐる——それで好いのだ。

▽僕の歌に「いい文字のない」のは勿論のことだ。境地や氣持が現はれさへすれ奴澤山だ。

僕は、歌は言葉の遊びや、言葉の純化であつてはならないと思つてゐる。境地と味ひを表現する「それが何より大切だ。だから、啄木のギョチない口調でも、朝風の俗な口調のものでも、それが作者の氣持を現はすに役立つて居るものなら、それでいいと思ふ。思想の、氣持の、表現の爲めでない單なる言葉の上の純化、研磨は、日本に於ける中古文藝の文字の技巧の重視を省みれば澤山だ。それは眞剣な藝術境ぢやない。遊びの藝術境だ。

▽僕といふ字は「奴隷の響がある」故に「朴」を使ふとは噴飯の至りだ。地主の奴隷たるにあきらめをつけ、更に「神」の奴隷たらんとする君の言としては、更に噴飯の至りだ。一層のこと、四の字を使へ。これにも、オウの他に、ボクの音もある。「へこんだボク」は似合ぢやないか。

◇ 【近藤憲二宛・四月十日】

泰さん（山鹿泰治）のラヂオに關する詳細な説明が來た。詳しい圖解を五つも添えた、英語入りの、すばらしく丁寧な奴だ。流石泰さんだと思つたね。御蔭で、かなりよく了解出來た。一二時間でいいから泰さんの四次元世界を通じて外に出て、「市村」か「新富」か「明治」かを、一寸立見したくてしょうがないね。ウント負けて、小柳か金車で、神田伯龍の「河内山」でも「五漢録」でもいいや、謹嚴なる諸同志から御ことを蒙るべき、情けない病氣だね。

「四次元」の世界と云へば、泰さんのラヂオ説明の尻りに、例の科學的大理想論が大いに吐いてあつた。第四次元の世界へさへ入り込むことが出來れば、歴史を逆轉させてやり直すこと位いなんでもない。第三次元の世界で肉體を失ふこと位いなんでもない」とある。大いに意を強ふしたが、さて、その第四次元の世界が何處にあるのやら、中々發見にむづかしさうだ。吾が愛する「碧巖錄」には、こんな宇宙なんか、團子に丸めてお茶で飲み込むことなんか、何んでもないやうに書いてある。この方法ならたやすい、先づ座禪をやればいいのだから——。

「四次元」の世界は、幾何學上當然あるべき筈の世界ださうだ。ソロバノ上、明らかなことださうだ。が、數理に暗い僕は、いまの處、泰さんに斯う答へて置くより仕方なかつた。四次元の世界はどうも勘定合つて錢たらずの様な氣がする」と。

魔子が「コードモノクニ」がもう馬鹿らしいと言つて來たとは、實に感慨深きものがあるねえ。いや、思はず便器で面を寫して見、白髪を引抜いて眺めて見たりしたよ。馬鹿に嬉しいやうな、泣きたいやうな、變な氣持ちになつた。大きくなつたらうな。

◇ 【望月福子宛・四月十三日】

今日はまた暖かですわね。運動場の傍の土山にこぼれて生えた大根が、黄色い花を開きかけてゐます。三味線草の薄白い花も、しよぼしよぼと見えます。監視寮の處の一本の櫻が、紅く蕾がふくらんで來ました。僕等も、近く花見が出來やうといふものです。春になつてから、雀がうんと殖えました。今年生れた雀の子が、盛んに轉りのおけいこをやつてゐます。日が沈んでしまつても、まだチュチュチュチュ、なんてやつてゐるのがあります。……いま遊び盛りですね、子雀の。

キミチヤン

カワイイ、カホラミセニキテクレテ、アリガトウ。キミチヤンノ、オウチノニワノクサニ、トキドキテンデクルヤウナ、シロイチヨウチヨト、キイロイチヨウチヨガ、オヂサンノトコロヘ、トンデキマシタ。ソシテ、マドカラ、カワイイコエデ、キミチヤンガ、キタデシヨウトイヒマシタ。オヂサンガ「アナタハ、キミチヤンノオトモダチデスカ」トキイタラ「アラ、シライノ、ワタシタチハ、キミチヤンニ、キツテモラツタ、イロガミヨ、ホ、ハ、」トイツテ、ワライナガラカヘツテユキマシタ。——キユウ——

◇ 【近藤憲二宛・四月十五日】

「白鷺」「慈吉選集」「農業の社會化」の三冊落手、多謝々々。

「茶話」はなん度よんでも面白いね。日本一のユーモリスト貝塚六老などは先づ自分から先きに面白さうに生つばを飲んで笑つてから駄目だ。しかし泣董のユーモアも、泣董型がチキンと出來てしまつてゐるね。三年も四年も書いてゐるや、その點は仕方がないけれど。

「治安維持法案」を抵當に入れて「普選」の借出しが成功したと、或る人の手紙の端しにもあり、また、面會の時に聞いたが、少しもその内容が分らない。この二つの内容と、實施期とを一寸知らせてくれ「喧嘩だッ」酔つばらひだッ「狂人だ」なんて聞くと、すぐ集つて見たいものだ。

我輩は今朝、枕元で南京蟲を一足殺したからな。この氣の早い奴には俺もおつたまげたよ。尤も多龍りをしたる爺が、彼岸も濟んだから一寸世間を覗いて見やう位のつもりで、這ひ出して來た奴らしい。すばらしく大きな奴だ。戰場萬馬生き残りの、彦左みたいな奴らしいが、とんだ處で討死しやがつた。死骸を窓から外へ爪ではじき飛ばしたが、あんな臭いのは雀でも喰ふまいて。

【中村しげ子宛・四月十五日】

山崎伯（今朝彌）がこないだ来て、『君のローマンスが人情俱樂部に出た』と話してくれたから面會のとき福子さんにその差入れを頼んだら「しげが何處かで探して来て持つてますよ」との事だつたぞ。そんな天下の大事件を僕に知らせてくれないで、獨りでクツ／＼笑ひながら讀んだとは實に怪しからん。早く、入れろ、入れろ！

が、一體、誰れがそんな惡戯をしやがつたのだらう。伯爵の話では、那須での事が詳しく出てゐると云ふんだが、那須の事をそんなに詳しく知つてゐるのは、江口君の外にないと思ふんだ。しかし、江口君は「人情俱樂部」なんてくだらない雑誌に書く管もなし、又そんな事を書かない人だ。尤も、あの當時、かなり親しくしてゐた大學生が三人あるが、まさかその男でもないし、と思ふんだがな。免に角、和田久も「人情俱樂部」などといふ、女郎のお伽雑誌の材料に使はるゝとは、なんとといふ名譽な光榮なことだらう。一淫賢婦を色女にもつた男には、或はそれ相當の取扱ひ方かも知れんがな、呵々。

今日は春雨だ。梅雨の様な春雨だ。婆婆は、もう櫻が咲いたらうなア——。

◇ 【伊串英治宛・四月二十日】

四月一日の君のハガキ確に落手した。俺も裁判の結果はどうなるか知れないが、強情に生きてゐるつもりだ。今のうちから、深呼吸、屈伸法、座禪、冷水磨擦、などと一生懸命だ。

それに、この分なら豫定が狂つて「病死」といふ奴に獄中に於て仲よくなければならぬ場合でも、大した口惜しさも執着もなく「やあ、やつて来たな、ちと足が早や過ぎるぞ」と、「死」に對して戲談の一つも言つてやれそうだ。大杉はよく口癖のやうに、我々は何時死ななくちやならないかも知れないんだから、その時になつて心残りがある様な生き方をしたくないものだと思ふよ。後で口惜しまないやうに常に力一杯の生き方をすることだと思つてゐたが、流石に大杉だつたと思ふよ。奴は實際さういふ風な強い緊張した生き方をした男だつたね。

僕にはとても大杉のやうな強い生き方は出來ず、我ながら恥かしいほどの下らない行動や、與太生活も随分やつて来たが、しかし、僕は自分自身を餘り買被つてもゐないから「まあ、まあ、俺の様な奴の生存振りは、こんなものだらう」と自分勝手な諦めをつけてゐるよ。豪然として、泰然自若として死ねなくとも、苦笑くらはして死ねさうだ。呵々。

君と相識するやうになつてから、早や大分になるね。例の萬松寺（名古屋）の合ひ以來だからなア（大正八年十月頃）君は「社會運動も組合運動も振はぬことと云つたら經濟界の不景氣と相ともなつてゐるやがる」といふが、潮のさし引きといふ奴はあるものさ。現在の社會狀態と萬松寺の時の社會狀態と思ひ合はせて見たまへ、運動の不振に憤慨しながらも、しかし又、快心の笑みを漏らさざるを得ないものがあるぢやないか。大きな力は絶えず動いてゐるよ。

◇ 【労働運動社宛・四月二十四日】

二三日、じめじめと卯の花くだしといふやうな奴が降る。卯の花の花垣ならぬ鼠色の高嶺になめくじの這ふの間もあるまいといふ様な氣がする。其後南京蟲を更らに二疋殺した。昨日は奴が一疋迷つて出た。まだ監獄の櫻は咲き揃はないのに——。

先便ち一寸書いた様に、僕は「俺の短歌だつて相當に旨いぞ」と、持ち前の瘡つ氣の上に已惚れつ氣を附加へて、獨りでニヤニヤと悦に入つてゐるんだが、どうも四方から來る手紙によつて判斷すると、僕の可愛い短歌は婆婆で人氣がないらしい。近藤君からの「短歌よりやつぱり俳句の方が旨い」と皆んなが言つてゐる」といふ報告を手始めとして、君の短歌は、どうも君らしくない」だの「歌なんや、變にセンチメンタル、メラソコイがくついついてゐて俺達には面白くない」だのといふ言葉を頂戴する。ちや、そのセンチメンタルな處にせめて女の子に可愛がられさうな倉田百三式のうす甘い涙つ氣でもあるのかと思ふと、「どういたしまして」だ。皆さま御存じの妙なる腔の持主たる中村しげ子からさへ、「俳句の方がずつといひ」とやられる仕末だ。それどころかい、はやはやの線と、神さまとで半分氣が狂つた千葉の精一の奴までが「久さんの歌はどうも……」と書いて來やがる。

しかし親は、世間からうとまるる子供ほど、よけいに可愛いものだつてね。何奴か、好いことを言つて置いてくれたよ。全く俺の愛兒たる短歌子が、そんなに皆んなからうとまれてゐるかと思ふと、流石に俺も親心の、燒野の雉子、夜の鶴、いとし可愛い我兒やと、よよとばかりに抱きしめ……てやり度いくらひに思ふよ。雨滴の太に載せられて、さ。

諸君の衆評を、つらつらおもひみるにだね。「うたより「ぬた」の喰ひたい手合ひのこととて、ただ「君の短歌は、變にセンチメンタルだから嫌だ」といふ一本槍にすぎない様だ。ちや、ウケ、タカ、マカ、カ、マリますがね、諸君「歌はセンチメンタルだつたらどうしていけないんだい？」

えッ、何んだつて、「歌が——「ちやない」「センチメンタルそのものがいけ好かないんだい」つてかい。——ウ……ム……ウ……ム……なるへそ——。

——イヤ、參つたよ、諸君、許してくんねえ。しかしどうもこれは僕には仕方がないんだ。諸君の知れる如く、僕の頭に大きな凹んだ禿がメリ込む様に印してゐるのと相まつて、僕の性情の中には、そのセンチメンタルな一面が深く喰ひ込んでゐるんだから……。

僕は最近、「悲痛の感激、悲痛の快感」と題する短い隨筆やうのものを書いたがね。それは、「僕は泉鏡花の前期の作品が大好きだ」といふ書き出しで「悲痛な感激を求める……これは僕の性情が如何に感傷的で弱々しいかを證明するものだ。僕に若し、幾分の強さを認めて貰へるなら、それは極めて後天的な感傷の氣持に徹する事によつて附加された「強さ」だ。僕は元

来弱い男なのだ」とか「僕は飽くまで悲痛なる感激を求めよう！そこに快感を掴もう！僕の本當の力は、この悲痛なる感激の中からのみ湧いてくる。弱者よ！その弱さに徹せよ！！」とかいふ様な、センチメンタルな文句が澤山書いてあるものなのだ。

ね、諸君、僕はこんなにセンチメンタルな男なんだよ。あんまり貰ひ被つて貰ひますまい、「君らしくない歌だ」なんて……

エ。フン。君の短歌に、そのセンチメンタルに徹した強さが現はれてゐるのなら幾分かは我慢してやるが、全るつきり弱々しい感傷ばかりぢやないか「つていふのか。畜生！中々するどく、細かく、攻めつけて来やがるなア——

まあ、そんなに緊張そのものの様な面をするなよ。前にもいふ通り、僕は岩ぢやないよ、ほんの凍つて固くなつてゐるんだよ。元來は水でござんすよ。日によつては解け出して、元の水が流れ出る場合もござりますよ。

勞運四月號出た由。また蔡の字かな。出れば取られる若荷の芽ぢや困るよ。

◇ 【松本親敏宛・四月二十四日】

二十一日の手紙有難う。出来るだけ目先の變つた本を集めて持つて行く「つてかい。うい奴、うい奴。人間、一度は入獄すべきものだね、呵々。

成るほどメーデーだね。成るほど」とは怪しからぬなどと呟くべからず。雲を眺め、雀の唄に聞き入つてゐると、娑婆のことは、ただ遠い雲の奥の様な氣がすることがあるよ。監獄のおかげだ。

「ほんとに食へなくて困る」てかい。では、食物に不自由のない監獄が戀しいといふ譯けだ。俺なんか「一二の飯を常に残してゐるよ。せめてこの残飯でもやりたいが、ママにならぬが浮世だね。

◇ 【近藤憲二宛・五月一日】

全集（大杉榮全集）の編輯、校正は、さぞ忙がしいことだらうとお察しする。僕の方は暇で困つてゐるんだから、校正なんかはもつてこいの仕事なんだがなア。『この窓こそは、くろがねの……』と明石屋張りてくといて見ても、軒の雀がケゲンさうな顔をして「チュチュ」と啼くばかり。御殿の「飯たき唄」なら踊つて見せるが……てな風をしてゐやがる。

胃病、腹痛、腹下し、發熱か。僕が、此間寝たのと同じだ。全くお互ひに自重しようよ、體は。僕も、其後食が進まず、従つて頭がぼんやりしてゐて少しも勉強が出来ない。困つたものだ。處で、ボンヤリしてゐるのは僕ばかりでないと思へて、差入屋の奴め、何を間違つたのか「本人依頼」なんてな事を書いて厚ぼつたいシヤツを入れて寄越したものだ。早速、宅下けし

やつてたら、又「本人依頼」として違つたシヤツを入れて寄越した。和田久太郎「本人」といへば先づ僕の事かと思つてゐたのに、他にも「本人」があるとして見ると、まごつかざるを得ない。ラヂオなんか出来る世の中の事は、ややこしい事が多くて困る。

斯くの如く、變なシヤツを舞臺ます辭に「決定書はいまだに來ない。僕は俳句をひねるお蔭で「雀化して蛤となる」だの「廢草化して螢となる」といふ有名な化け方は知つてゐるが「豫審決定書化してシヤツとなる」なんてのは知らなかつたよ。過激法化して治安維持法となる」よりもヒドイ化け方だからなア。

處で、今日はメーデーだ。いい天氣だ。芝公園の叫び聲はとも此處までは聞えないが、その代り、ショウコン社の花火の音がよく聴える。イヤ結構なお天氣。

私有財産を否定するとやられるんだつて、フフ………始めから私有財産なんかない奴は皆な……困りましたね………公園なんかは、皆な誰か個人の庭園にでもなるんだらうね。成る程。宮崎が私有財産をちつとでも殖やさうと、借金しながら増築とやらをする心理も確かに此の影響なんだね。

總同盟はいよいよ二分か。フン………共産黨の地盤が一つ出来あがるねえ、僕の推察では——。

◇ 【望月桂宛・五月四日】

今日教師に會つて「雲水物語」といふ本を貸して欲しいと頼んだ。その教師君は先達つて僕と「一茶」を談じ「桃水」良寛などの話も聞かせてくれた人である。

今日も一寸、「桃水」の話と言ふよりは、作者の安右衛門（宮崎）の話が出た。洋行した江渡（秋嶺）君も、死んだ久板（卯之助）君も知つてゐたらしい。

聞けば「桃水」が再版されるさうだ。君はその挿畫の筆者として、大いに安右衛門をおこらせる權利がある。

陽炎や安右エが拜む馬の尻

◇ 【曾田英一宛・五月六日】

手紙拜見。眉目秀麗な二十歳の青年アナキスト増田英一君か。いや、初めて溫信に接する。僕の方からも宜敷お願ひしよう。

ウタ拜見した。啄木と哀果の匂ひが多分にすると思つたつけ。

曾田君ナイメムンバムンバ………文學青年の新熟語では、斯ういふのを「三行詩」とかいふさうぢやないか。どうだ。僕だつて中々「通」だらう。それに、水谷八重子といふのは宵丈はすつとして……家鴨の如く、その面ざしはトマトオの如く福よかに、その妙なる

音聲は風邪を引いたる落音機（ラヂオは知らないから）の如しといふことまで、ちゃんと心得てゐるんだもの、中々どうして隅つこに、殊に煉瓦塀中の隅つこなんかカビらせて置くのは惜しい男さ。

花は運動場へ出ないといふ。獄窓から見る花は、初めて最近、極く貧弱な一本の蒲公英が咲いてゐるのを見出した。「獄窓から見る花」としては、實にふさわしい花だ。

霧の夕陽に映る花の影は、母の我がセンチメンタル歌に曰く。

四月は盡きんとすらし一本の

瘦せたんぽぽよ霞みても消え

◇ 【中村しげ子宛・五月十二日】

十日と十一日は監獄もお休みだった。十日には紅白の、饅頭だの尾頭のついた魚だのお芽出度いだらけだった。塀外の官舎には薄紫の桐の花が咲き、門衛の看守君の胸間には、いやちこなる勳章がキラ／＼と輝いてゐた。夜は雨の中で打ちあがる火花が僕の窓からよく見えた。十一日の朝こんな歌が出来た。

桐の花に朝の風吹き牛乳を

飲むはよろしも獄屋禮讃

安右衛門といふ男は、馬の尻を禮讃し、乞食を禮讃するが、僕は桐の花匂ふ且の微風に吹かれて牛乳に舌鼓を打ちつつ獄屋を禮讃する。生活難で困つてゐる人々は、さぞ僕を羨望することだらう。銀座で立ち止つてラヂオのソプラノを立ち聴き出来たところで、それが何んだとね。フ、フ。

鏡花の本、まだ来ないよ。どうしたのか。藤間（電話で掛け合つてくれ。

雀の音風に散りつつ桐の花

さやかに咲きぬ本を待つなり

だ。よろしく頼みやんす。

◇ 【望月福子宛・五月十五日】

九日附お手紙有難く拜見、殊に紫匂ふ草の押花の御心遣ひは、しみ／＼嬉しく存じました。昨日は小諸からの、しげ子君の長文通信を受取りましたが、その中にも同じく押花がありました。それは眞白な山櫻と、濃青なその葉に添えられた、山吹きの眞黄な花でした。しげ子君には、またこの次ぎに禮手紙を出します。

『いつもながつたらぬ事はかり書く事が自分ながらななくなつてしまふのです』とありますが、僕の様な男は固くるしい厳肅張つた手紙ばかりしか貰へないのだつたら、それこそ大

閉口です。やはり、いろんな日常のくだらない事や、むだ言や、たわいのない話もどし／＼欲しいと思ひます。人々にはあまりこの事を考へてゐない様ですが、若し人間の生活に何一つ下らない事がなく、むだ言一ついふことが出来ず、たわいのない話しが少しもなかったとしたら何うでしょう。そんな生活を長らく續けてゐたなら、人間は忽ちの間に千鱗の如く、しやちこばり、鬼瓦のやうな顔になつてしまふに違ひありませんよ。さう考へると、くだらない事や、むだ言や、たわいのない話なども亦、人間の生活の上には、どれほど大切な役目を果たしてゐるかが解ります。子供の家庭が何處となく淋しく、子供の家庭の如く、子供のある家庭の如く、子供は振り撒いてくれるからだと思ひます。世間からは地の底の陰惨な生活の極みの如く想はれてゐる監獄の中にもそれ相當のくだらない事、むだ言、たわいのない話などがあり、従つて「笑ひ」もあります。人間といふ動物は、どんな境遇の中からも之れを汲み取つて、樂しみの餌食としようと、「笑はう」とします。餘り淋しい時には、猫の泣聲を眞似たりなんかして近處の室房を笑はせてくれる飄キン者もあります。それ等のものがなければ、人間は生きてゐられないのだといつてもあながち過言ではなからうと信じます。

夜、はばかりの窓にそつと立つて、蛙の鳴く音を淋しくなつかしむなんぞは、些さか俳趣味ですな。

ことはぎにも雪隠思案鳴く蛙

はどうですね。それとも、

蛙なく便所の窓やもの思ひ

の方がすなほいいですか、ハハハ、。

残念ながら、僕の鐵窓には、まだ蛙の鳴き聲は聞えませぬ。僕は蛙が好きですよ。遠くで聞く鳴き聲も勿論悪くはないが、僕はあの面付きが妙に好きです。藁の面になると、少し憎憎しく感じますがね。蛙にも色々種類があります。

古池や蛙飛び込む水の音芭蕉

これは蟬家の蛙ださうです。

悠然として山を見る蛙かな一茶

この蛙は、先づ支那詩人でせうな。

大盗の思案する夜や遠蛙失名

この蛙は、社會學者といふ所ですね。

古戦場眞間の井

散る花をはつたとにらむ蛙かな一茶

この蛙は、修羅場讀みの講釋師です。

蛙 なくや狐の嫁が出た出たと 一 茶
は、即ち野次馬蛙。

手をついて歌申上ぐる蛙かな 宗 鑑
は、御用學者の蛙。

薄 縁に尿してにげる蛙かな 一 茶
は、宮崎の五月雨の新公蛙で、

落の葉にとんでびつくり蛙かな 一 茶
は、公つべい蛙。

いや、蛙から、飛んだ與太を書いてしまひました。
僕の窓は、先づ監獄中の特等席でせう。この頃は、若葉と並んで、薄紫の桐の花が見えだしました。そのうちに、鉢植の百合が咲きます。

◇ 近藤憲二宛・五月二十二日

昨日は皆んなで御苦勞、感謝する。公開でやりましたねえ！ 大阪の判検事の頭よりは東京の判検事の方が幾分かましだといふ譯かねえ。阿々。

僕もあれだけ言へば澤山だ。もう少し心残りはない。全く大川で尻を洗った様な氣持ちだし。せいせいいしたよ。が、あれを全部新聞に發表させたかしら？

貴前にはどうも君の顔が見當らなかつたが、午後はよく見えた。恐ろしい顔付きをして脱めつけてゐたねえ！

◇ 望月福子宛・五月二十三日

一昨日は裁判所での面會有難う。あそこの庭で自動車の窓越しに見た時、公ちゃんは何んだか泣いてゐた様でしたねえ。あの時、僕の隣に腰掛けてゐた豪傑江連力一郎といふ男が『貴君の子供ですね、泣いてゐる、可哀相にねえ』といつて、ほろりとしてくれました。僕はなんとも答へず、くすぐつたい苦笑を漏しました。公つべいが聞いたなら『久バカ！』つて憤慨する事でしょう、阿々。

僕が髭をすつかり剃り落して行つたら、偶然に古田君も綺麗に剃り落してゐました。『何んだ、君も剃つたのか。俺の眞似をするない——』なんて云ひながら、顔を見合はせて大笑しました。

や あ 君 も 髭 落 した か 衣 更

◇ 歸りには雨で困つたでしょう。——

【中村しげ子宛・五月二十三日】

禁止だと思つたが、公開でやりましたなア。お蔭で皆んなの顔が見られて嬉しかつた。庭の自動車の時、君が第一番に見つけた様だつたねえ——。それに偶然と、あそこで自動車が暫く止つたのは面白かつた。

法廷での寫眞隊には驚いた。それに、後ろからも前の方からも「こつちを向いて下さい、こつちを——」なんていやがつて閉口してつた。しまひには、少し小うるさくなつて来たから、くるりと後ろを向いてやつた。二銭銅貨大のハゲでも寫しておけ——とばかりにね——

兎に角、云ひたいだけの事は言つてのけたんだから、僕はもう、これで充分だ。後は、手綺麗に料理をして貰ひ度いと思ふばかりだ。

あの法廷に、村木を立たすことが出来なかつた事だけは残念に思つたが、仕方のない事だから仕方がない。

望月のハゲの光りが見えなかつたが、来てゐなかつたんだらうねえ。どんな人達が来てゐてくれたのか、十三三人の御馴染顔は明らかだつたが、後とはハッキリ解らなかつた。珍らしい顔では橋浦君が見えたが……。また暇に、裁判の時の外の様子や、どんな人たちが来てゐたか知らしてくれ給へ。

◇ 伊串英治宛・五月二十三日

一昨日は公判だつた。どうせ傍聴禁止だらうと思つてゐたのが、案外公開だつたので、久し振りに皆んなの元氣な顔を見て嬉しかつた。そして福田の事件の方の事實調べが片づいた。次は六月十六日だ。

古田君の大阪の方の事件と一緒に東京でやるのださうで、十六日は主としてそれをやるさうだ。しかし、それが早く済めば其の日に検事の求刑もやつてしまふかも知れないね。まア、六月中には俺達ちの體も片がつきさうだ。昨日法廷で云つて来たから、なんだか胸がすつとして日本晴のした様な心持ちだ。もう此の上は、締めやうと、煮て喰はうと、御勝手次第になさいました。愉快に笑ひながら死んであげます、といふ晴々した氣持ちだ。

雲を眺め雀の歌を聞き、その遊ぶのを眺めながら「けり」かな」と好きな發句でもひねつて判決を待つばかりだ。

金網の目をぬけて會ひに來た 蠅 ぞ

◇ 増田英一宛・五月二十三日

十八日附手紙見た。裁判に行くにあつたから、眉目清秀の一青年なら直ぐ見えるだらうと思つたが、どうも分らなかつた。眉目混濁や、眉目怪光ばかりだつたぞ。眉目清秀なのはただ一

人目についた。しかし、それは傍聴席ではなく、向つて判事の右隣りに赤鬼の服を付けてゐた好青年だ。たぶん、陪席判事なんだから、實に眉目清秀（少し肥りすぎてゐるが——）と、惚れ／＼と眺めたよ。

君の三行詩、こんどの方が少しは旨いやうだ。俺が君から短歌をはめて貰つたのだから、君に倣つて三行詩を作つて見ようか。

俺にだつて力はあるぞ

空拳をふつて見たれば

體ふらつく。

あゝ唯物論の眞理が恨めしいわい。

◇

【布施辰治宛・五月二十五日】

「昨日だつたか、僕が公判の時に持つて出た「手控」を郵送しましたが、受取つて下さつたでしょうか。

先達で面會の時、中瀆（鐵）の處へ傳へて頂きたい事があるから、近い中に書いて送ると言ひましたが、さて、書かうとなると、あらゆる感情が怒濤の如く頭の中へ押しかけて来て、それをどう書いていゝのか、ただ呆然としてしまふんです。何かついでがあつたら、左の歌を書き送つて下さい。

苦 笑

漢江の氷を掘りて鯉を釣る

餌なき釣を誰れか笑ひし

大阪の辯論には行けたら是非行つてやつて下さい。

◇

【江口渙宛・五月二十九日】

其後御無沙汰してゐる。皆んな御變りもないか。聞けば、此の春頃、何んとかいふ熱病にやられてしばらく寝てゐられた由、ちつとも知らなかつた。不景氣と病氣ぢやたまるまい。これからまた梅雨だ。要心したまへ。

僕は丈夫だ。毎日トボケ面をして鐵窓から雲の去來を眺めながら、且に一句を吐いて、夕に死すとも可也」位の落着は示してゐるから安心してくれ給へ。が、何も即身成佛と悟り澄して、法悦の歡喜とかに浸つてゐる譯ではない。僕はある情感によつて死ぬことは出来るが、法悦なんかによつては死ねない男だ。ただ僕の力でやれるだけの事は（事の成否は問はないでもよい）やつて来たやうに思ふから、かうして監獄で死んだ處で大した恨みもないと思ふと、俺の死ぬ時には、何か戯れ口でもたたいやりたいものだ」などと思つてゐた日頃の考へが、今

の僕に悟り面をさせるだけなのだ。自分自身をそんなに買ひ被つてゐないから、比較的僕は氣楽なんだろうと思つてゐる——。

「本」有難う。漱石の「日記と断片」を二三日かかつて讀んだ。日記を見て、彼の小説に現はれてゐるよりも、より多く彼は厭世的な氣質の男だと知つた。

處で、あの日記を讀んで、大いに今日までの考へを蘇えさせられたものがある。と書くところと大げさだが、それは彼の俳句だ。僕は漱石の句といへば、

景 清の 眼 玉 を 拾 ふ 田 螺 か な

竹 篠 を ふ み 削 る 猫 の 思 ひ か な

といふ様な句を通して、滑稽味はあるが大して旨くはない句作家だと思ひ込んでゐたのだ。

秋の 江に 打ち 込む 杭の 響き か な

といふ句は、先づ秀中の秀だらうと獨断してゐたのだ。が、その修善寺に於ける病床日記に書きつけられた澤山な句を見るに至つて、僕のこの考へはすつかり覆へされた。あの中には非常にいい句が澤山ある。

生 きて 仰 ぐ 空 の 高 さ や 赤 蜻 蛉

天 の 河 消 ゆ る か 夢 の 覺 束 な

殘骸猶春を盛るに堪えたり

骨 の 上 に 春 滴 る や 粥 の 味

なんか、殊に感心した。

◇

【望月福子宛・六月三日】

いよ／＼梅雨ですね。少し早く今年はやつて来たやうです。塀外の桐の花も榎の花も、皆な過ぎ去りました。そして、ただ雨だけが、ちと／＼と降つてゐます。従つて、

世の 底の 五月 雨の 底の 默 座 か な

てな、陰氣な句が出来ます。が、雨が少しでも晴れて、陽の光りが漏れると俺と一緒にやつてハシヤいであますよ。そんな時、庭に溜つた雨水の影が軒先の板に寫るのを眺めながら、影の好きな貴女のことを思ふ事があります。

蠅 と ぶ や 軒 に う つ ら ふ 水 の 影

どうです。平凡だが、悪くはないでせう。呵々。

此頃、雀の子供が澤山庭へ現はれ出しました。茶色もまだ薄く、尾も短く、頬の所の黒い毛がないから直ぐ分ります。まんまるく肥つて、綿で構えたおもちやの様な格好をして、ビョイビョイ飛ぶのが、實に可愛いですよ。時々、虫を追つかけるが、中々うまく取れない様です。草花をついて見たり、葉をむしり取つたり、小石を脚でひよいと後ろへ跳ね飛ばしたりして

遊んでゐます。そして、時々、母雀が何處からか飛んで来ては、口うつしに食べものをやつてゐます。

僕は、飯粒を金網の目から吹き飛ばしてやりましたら、驚いて、パツと皆な逃げてしまひました。が、直ぐ母雀が来て、子供達を其處へ呼びよせました。が、子供達は、自分で拾ふとはせず、母親のくれるのを口をあいて待つてゐます。要するに、甘へてゐるところなんでせうね。母雀が行つてしまふと、獨りで食べるのもあるんですから。……

◇ 中村しげ子宛・六月五日

たまの日曜には、散歩に位行くがいいぢやないか。この頃なら鴻の臺邊だつて悪くはないよ。アメチヨコ・ハウスを足場にして、玉川べりへ出るのも好からうぜ。連れない時には、一人だつていいぢやないか。僕は一人で散歩するのが大好きだ。

何んだか近頃は、木曾の山奥邊を一人でとぼ／＼歩いて見たくて仕方がない。一ヶ月ばかり「囚人の夏休み」でなものはないかなア……。山の旅行もいいが、魚釣りも悪くはない。

——なんて、頭の中でいろいろ／＼な事を考へて見てゐる。

魚釣りと云へば、朝鮮の漢江で、冬、鯉を釣つて居るのを見たが、その趣きが馬鹿に僕の氣に入つたんだ。少し、その話をしようか。

京城と龍山とは殆んど街つづきなんだが、その龍山の南に、漢江といふ大河がある。冬は氷が厚くはつて、氷の上を荷馬車も渡れば自動車も渡る。あちこちでは、黒い朝鮮服を着た青年が盛んにスケートをやつてゐる。その、道路やスケート場を少し東へ行くと、山の陰に、白い服をだらりと着て、大きな笠をかぶり、長いキセルをくはへて、髯の垂れた鮮人が、お尻へ敷物をして、悠然と腰を掛けてゐる。何をしてゐるのかと思つて近寄つて見ると、二尺から三尺もある厚さの氷を二尺四方ほど穴あけて、そこから糸を垂れて何か釣つてゐるのだ。大きな白木のウキがついてゐるが、一時間ほど見てゐたが少しも動かない。少し先きの方で糸をあけてゐるから見に行く、と、眞鍮色の大きな釣で、餌をとられたと見へて、何にもついてゐない。「何が釣れるんです」と僕は聞いた。と、それは若い鮮人だつたが「鯉です」といふ。餌をとられましたね」といふと、彼はケゲンな顔をして僕を見た。そして曰ふ「餌はいりません。冬の鯉は餌を食べません」といふ。ぢや、どうして釣れるんです」と聞くと、「川底を動く鯉が、この釣に當つて引つかかるのを待ちます」と澄ましたものだ。流石の僕も「へー」とおつたまげてしまつたね。で、「それでよく釣れますかねえ」といふと、「運のいい人は毎多中に一尾釣ります。大抵は三年に一尾位です。私は去年釣りましたが、今年はまだ釣りません、駄目でせう」と、妙な笑ひ方をした。

僕は、この鯉釣がやつて見たくて仕方がない——。

◇ 【武田傳次郎宛・六月六日】

先月二十九日附の手紙、この一日に受取つた。厚く御禮を云ふ。僕もその後はずるぶる長らく御無沙汰してゐた。妻君も春雄君も皆な壯健だらうと信ずる。宜しく傳へられたい。

死んだ村木は、よく君の妻君のことを噂するのが好きだつた。そして「實にいい人だ。あんな朗らかな感じを受ける人は少ない。が、一度僕は南瓜が好きですと云つたら、二日間南瓜ばかり食はされたのは、ちよつと閉口した。しかし、全く好い人だね」と言つてゐた。相變らず、君は酒をなめ、妻君は活動寫眞へ……かね。阿々。

九平（武田）君が諫早へ入れられてから早や十五年になるかねえ。駄目だとは思ひながら……あゝこれで十五年に二度馬鹿を見た譯けだ」との君の述懐は、胸を熱くせずには讀むことは出来なかつた。僕は君のこの述懐につけても、僕の事件によつて、とんだ巻き添えを喰ふ人のないことを心から祈つてやまない。大阪の事件のことは僕には全く分らないが、僕の方の事件では、一寸した引つ掛りで重くやられる様な事があつては氣の毒だと思ふのは、新谷（與一郎）君だ。僕は初めから覺悟の上のことなんだから、どんな無茶な刑に處せられても笑つて受けるが「なんにも殆んど知らずに」といつていい位の新谷君は、どうか無茶な引込まれ方をしない様にと、祈つてゐるよ。

九平君は繪が旨くなつたかね。丈夫で、繪でも書きながら靜かに、氣長く待つて貰ふより仕方がない。社會の流れはだん／＼濁流を増しつゝ急激になつて行く……その流れの中から、オリーと君を呼びかける聲が次第に聞えてくる。靜かに待て、落着いて生を養へ！」といふ様な手紙をあげてくれ、九平君に。

君より、お母さんが、また深く歎息された事と思ふ。

僕の體は、御承知の如く細いが、案外確かなものだ、安心してくれ。山正（山田正一）が妙な事をやらうとして引張られてゐる、あの體を思ふと、何んだかイタイらしいやうな感じに打たれるよ。氣の毒だが、入獄しちや、長持はすまいな。——僕の方の公判は、この次は十六日だ。主として古田君の大阪事件をやるらしい。同一事件を、東西に分けてやるなんて、全く滑稽だよ。

まあ、君も體を大切にしてくれ。酒に浸つて、せめて苦痛を免れ様とする君の心持ちはよく分るが、しかし體を大切にしてくれたまへ。

君の新居近くに長堀川のあるを憶しつ

大阪は葉柳ならぬねむれる

丁稚の落ちて死んだあの川